



Title	平野の歴史を生かす町づくり「含翠堂講座と連歌再興」
Author(s)	川口, 良仁
Citation	懐徳. 1987, 56, p. 6-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平野の歴史を生かす町づくり

「含翠堂講座と連歌再興」

含翠堂顕彰会・平野の町づくりを考える会

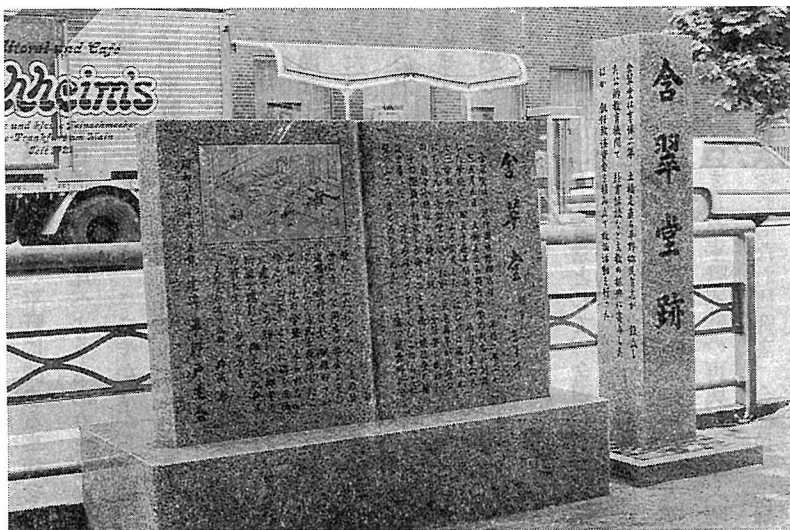
川 口 良 仁

平野は、現在大阪市の東南部に位置し、古来より交通の要衝として発展、戦国時代には環濠集落を形成し、後には堺とならぶ自由都市として繁栄しました。今次大戦の戦火をまぬがれた町は、元和二年に造られた町割りもそのままに、古い町屋や環濠の出入口にあった十三の地藏堂が現存し、威勢の良いだんじり祭りに代表される伝統あるくらしと文化が残る貴重な地域です。

しかしながら、旧家の老朽化と共に建て替える時期に達し、他の都市部と同様再開発による環境破壊が進行しつつあります。

こうした状況にあって、失なわれてゆく町のよさに気づき、自らの住むまちの個性を守ろうという気運が盛り上がったのは、昭和五十五年の南海平野駅舎の保存運動がきっかけでした。以後「歴史を生かす町づくり」をスローガンにさまざまなイベントを開催する一方、歴史的な文化財の調査や顕彰、保存活動も行なって来ました。郷学といわれる「含翠堂」の顕彰碑建立と講座の開設も、その町づくりの一環として取り組んだものです。

◎「含翠堂講座」の開設―昭和六十年五月―



含翠堂跡地に建てられた顕彰碑（右・大阪市、左・平野戸主会）

含翠堂は享保二年（一七一七）薬種商の土橋友直ら平野郷民有志が、現在の平野宮町二丁目に設立、明治五年（一八七二）学制公布で廃止されるまで一五五年間続いた民間学問所で、平野における近世の民衆教育の原動力となっていました。運営は有志の寄付金でまかなわれ、教育だけではなく別に基金を設け社会事業にも貢献しました。

昭和六十年は土橋友直の生誕三百年に当るのを記念して、地元の組織「平野戸主会」と「町づくりを考える会」が協力して跡地に顕彰碑を建立、それに伴い「含翠堂顕彰会」を発足させ、事業として年二回の「含翠堂講座」を開設することになったものです。

幸いなことに含翠堂に関する資料が收藏されて居ります御縁から、大阪大学の名誉教授・梅溪昇先生より顕彰碑の精彩なる撰文をいただき、また第一回の含翠堂講座では、大阪大学教授・脇田修先生に御講演をお願いす

ると共に貴重な「含翠堂資料」を借用して展示させていただきました。以後、講座は六回を数え各方面より先生をお招きして、平野に関する事柄を中心に勉強してまいりました。

立派な懷徳堂講座とは比べようありませんが、自治都市「平野郷」の郷民が自主的な運営をした先徳の心意気を受け継ぎ、ささやかながらも郷土の文化向上に役立てればと願っております。

◎「平野連歌」の再興―昭和六十二年五月―

含翠堂を設立し、それを支えた力は平野の歴史的な文化土壌によって培われたものです。

平野郷は早くから坂上家や七名家を中心として京都の公卿たちと交渉があり、和歌・連歌・能楽・茶の湯などが盛んで、中でも連歌は平野「杭全神社」に連歌所を造営するほどの本格的な活動でありました。この連歌所は、大坂冬の陣で破壊されたものの、宝永五年（一七〇八）中世の基本にそって復元され、現在もその建物が残されていて、連歌所として現存するものでは全国唯一であると言われています。また、会席に必要な御神像、文台など遺風を伝える什物も整い、慶長十四年（一六〇九）に奉納した連歌一巻や享保九年（一七二四）の奉納連歌千句横本など連歌の隆盛を示す資料も多く残されています。

そのようなことを背景として、含翠堂講座が第五回目を迎えるに当り、含翠堂と同じく平野文化のもう一つの特徴というべき「連歌」の再興を思い立ちました。杭全神社・藤江正謹宮司の賛同を得て、大阪大学教授・島津忠夫先生、京都女子大学教授・浜千代清先生の御指導のもとに、明治以来久しく途絶えていました平野連歌の再興が本年（昭和六十二年）五月五日に実現しました。

当日は、短歌をたしなむ研究者、会社員、主婦、学生など約百四十人が参加、連歌作法などの講義の後、実作を見学しました。興行の舞台になった連歌所の十二畳敷きの主室には、牛頭天王と熊野権



約百年ぶりに再興された連歌会（杭全神社・連歌所にて）

現の掛け軸、三十六歌仙の額が掲げられ、古式通りのしつらえ。まず執筆と宗匠を兼ねた進行役の浜千代教授が「法楽の連歌を宗とする」「春、秋、恋の三句を基準とする」など《平野連歌八則》を読み上げ、島津教授、奥田久輝・園田学園女子短大教授ら六人の連衆が歌仙形式で始めました。約二時間という短時間ではありましたが、途中見物客の中からも六句の付け句が飛び出すなど盛り上がり、最後に三十六句を神前に奉納いたしました。

奉納連歌は、福岡県行橋市の今井祇園社で継承されていますが、中世の盛時のたたずまいを見せる連歌所が使われたのは近年では初めての試みと思われます。杭全神社では今後共、定期的に連歌の会を催して行く予定をしております。〈座の芸術〉ともいわれ、かつて平野郷の文化交流の場でもありました連歌を、町づくりの一環として今、この時代にこそよみがえらせる意義を強く感じます。

